

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：51303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00067

研究課題名（和文）梵文『法華経』形成史および伝承史解明のための文法的検討

研究課題名（英文）Grammatical analysis for clarifying the history of the formation and transmission of the Sanskrit 'Lotus Sutra'

研究代表者

笠松 直（Kasamatsu, Sunao）

仙台高等専門学校・総合工学科・准教授

研究者番号：40510558

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、3カ年の研究期間内に8回の学会発表を行い、計8報の論文（うち英文2報）を公表した。加えて現時点で2報が受理乃至印刷中である。主要な古写本に動詞語形を徴して、古層写本の中期インド語的な読み（能動態ないし母音幹を取りがちである）から新層写本の古典サンスクリット的な（「正規」のサンスクリットの中動態ないし非母音幹の）読みへと移行する次第を動詞語根8個に即して明らかにし、原『法華経』では中期インド語の特徴が色濃いことを明らかにした。こうして動詞の活用形の古典語形への遷移、または古典語形への「校正」の次第を跡付けることで、写本系統を明らかにする手法の可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は梵文『法華経』に現れる諸語形を精査し、ヴェーダ・パーリ文献から古典期までのサンスクリット言語史・文献史に位置づけた。禁止法について、アオリスト語幹による構文は新層ネパール写本の改変によると論証。現在語幹の活用の推移を論じ、古層写本では能動態乃至 thematic 語幹が卓越するが、新層写本では順次古典梵語的な中動態乃至 athematic 語幹に移行する次第を解明した。一部写本は「校正」を貫徹せず、希求法・命令法等に thematic 活用を残す。ギルギット伝承の文法的知識については再検討を要する。以上、動詞語形を精査し、原典の言語状況と写本伝承の実情を解明する手法を斯界に提供したと評価されよう。

研究成果の概要（英文）：In this research project, eight conference presentations were made during the three-year research period and eight papers (including two in English) were published. In addition, two papers have been accepted or are in print. By examining the verb forms attested in the major manuscripts, I have clarified the transition from the Middle Indic forms (which tends to take the active voice and thematic stem) of the Kashgar and Gilgit manuscripts to the Classical Sanskrit forms (which presents the middle voice and athematic stem) of the Nepalese manuscripts. And it has been shown that the original Lotus Sutra has a strong Middle Indic character. By tracing the transition of verb forms from Middle Indic to Classical forms, or the 'proofreading' to Classical forms, the papers show the potential of this method for clarifying manuscript lineages.

研究分野：インド学・仏教史学

キーワード：梵文『法華経』 仏教混交梵語 サンスクリット文法研究 古インド語動詞研究 現在語幹の活用 禁止法 カシュガル写本 ギルギット写本

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

『法華經』は、東アジア仏教諸派が数多く所依經典とする、思想史的・文化史的に重要な經典である。その原典は紀元後1-2世紀頃に中期インド・アーリヤ語(MIA)的な言語で形成され、次第に標準サンスクリット(梵文)化されていったものと思しい。

20世紀初頭にケルン・南條による梵文原典の校訂本(KN本)が出版され、以後の原典研究の底本となったが、これは11世紀以降に書写されたネパール伝本を基礎とする。一方で漢訳『法華經』、特に広く流布した『妙法蓮華經』が中央アジア伝本に基づくことが明らかになるにつれ、研究者たちの興味は中央アジア所伝本のうち、特に古い5-6世紀の書写に係る旅順博物館蔵写本に移って行った。しかし旅順写本は45枚の断片群に過ぎず、『法華經』原像探求の資料としては不足に過ぎる。他方、9-10世紀の書写とされる中央アジア・カシュガル写本は全編の過半が伝わるが、戸田がその全貌をローマナイズするも(1981年)、「奇怪な梵語化」(辛嶋, 1997年)を示し、特に散文で明らかな増補があると評され、学会の注意がやや低かった。

しかし報告者が最近、この写本の伝える語形を改めて検討したところ、カシュガル写本が散文部分にもMIA的な言語現象を数多く伝え、かつその語形成法は時代的に先行するアショーカ王碑文や南方仏教パーリ語經典群に連なるMIA文法に合うことを見出した。さらには同じ語根(例えば *sthā*)に発しながら派生方法を異にする語形(*asthāsi*・*asthāt*)の出典箇所が特徴的な偏りを示す例が見出された。「提婆品」は『法華經』最新層をなすと目されるが、各写本で共通して正規梵語文法に従う語形を色濃く伝える。恐らく他の箇所が成立したのち、サンスクリット語の知識に秀でた一派によって新たに編纂されたものであろう。即ち文法の推移が文献内部の層序と相応する可能性が示唆される。

このような語形の分析と文法の推移の観察によって文献層を確証する手法は、実のところ報告者が院生時代以来、得意としてきたものである。そこでこの際、ヴェーダ文献研究で培った手法を仏教梵語文献研究に適用しようと思立った。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は『法華經』成立史・伝承史解明に資する言語的指標の確認にある。

特に中央アジア写本に見られるMIA的な名詞・動詞の活用形を取り上げ、紀元前のヴェーダ文献からパーリ語・叙事詩および古典期にいたるサンスクリットの言語史の文脈の中に位置づけ、純粋に言語学的な分析を行う。

このような通時代的な検討は、仏教混交梵語文法・辞書(1953年)の著者F. EDGERTONや、本報告者のようなヴェーダ文法学から出発した研究者によって初めてなしえる領域である。従来の研究は、KN本を主たる原典としていても、漢訳(特に鳩摩羅什訳の『妙法蓮華經』)やチベット訳の解釈に引かれる傾向があった。また、宗教的に重要な文献であることもあり、思想研究が主体であった。言語学的見地から研究しようとした先学もあったが、対象とする単語は、例えば *mahāyāna*-「大乘」など、思想的意義の大きい名詞に集中するきらいがあった。そこで本研究では可能な限り純粋に言語学的な検討を行い、この視座から知見を得ることに注力する。

カシュガル写本が、筆写年代がやや降るとはいえ、韻文にも散文にも中期インド語文法に基づく語法を組織的に残すことは報告者がすでに多数確認した所である。また時折、章ごとに様相を異にする語法や言語層の違いは編纂年代や地域、あるいは編纂主体の違いの存在を示唆する。これらは『法華經』内部の歴史的・思想的層序関係を示唆する客観的な指標となり得る。こうした指標を確証すれば、他の經典(の写本)の研究に際しても有用であろう。

3. 研究の方法

主たる検討対象であるカシュガル写本（戸田校訂本による）の、特に第 V 章および第 XII 章を中心にテキストを読解し、任意に語形を取り上げ、荻原・土田本索引を用いつつ KN 本ないし諸写本から網羅的に出典箇所を調査し、抽出した各語形を文法的に解析して写本間の関係を考察。さらに Vedic Word Concordance やパーリ文献索引、電子テキスト等を利用してヴェーダ文献から古典期文献に至るまでの関連語形を検索し、『法華経』に見られる語形の言語史・文献史上の位置を明らかにする。

梵文『法華経』第 V 章の後半部分は鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』に存せず、成立時期を異にすると考えられる。前半部分と言語層を異にする可能性が高い。また第 XII 章「提婆達多品」は、漢訳編入が遅れており、やはり成立時期を異にし、他の諸章と異なる言語的特色を持つものと思われる。こうして手法を確立し、他の諸章に検討の手を伸ばしてゆく。報告者は永く、本研究課題の遂行に適した業績を積んできた。本報告時点にも着手している論題は複数あり、今後の生産性も高い。

要約すれば本研究課題の手法は 1. 索引を用いて網羅的に語形を調査し、2. 網羅的に抽出した語形を文法的に解析する。その上で 3. 解析した結果を広くサンスクリット文献史の中に位置づけ、当該文献の言語史上・文献史上の位置を明らかにする、というものである。

以下、研究成果を簡単に報告する。

4. 研究成果

4.1. 現在語幹の推移について

KN 校訂本が示す動詞 *ram* の能動態・中動態の語形の揺れに着目、本来はカシュガル写本が示すように能動態で一貫していたであろうことを推定した（笠松 2020 「梵文『法華経』諸伝本における動詞 *ram* の現在語幹活用形の変遷」）。*vi-śram* 「休む」の現在語幹は、サンスクリット環境であれば *vi-śrāmya-* と作る（KN VII: 188,2 *viśrāmyata* の如く）ところが古写本は Gilgit A: 91,26 *viśramata* や Kashgar 182a3 *viśrramatha* の如く読む。これらは MIA 語形であって、本来は古写本の如く読んだものであっただろう（笠松 2023 「試論集」各論 IV）。

4.2. 能動態・中動態への注目

本来能動態で活用する動詞 (*pari-dev*) は、カシュガル写本でも能動態で伝わる。しかしギルギット・ネパール伝承では中動態語形を嗜好する傾向が現れる（笠松 2021b “*paridevate, paridevadhvam, paridevatha*”）。やはり本来能動態で活用する *bhū* 「なる」は、韻文部分で特に中動態を示すことが多い。これは韻律的な要因による後代のテキスト「校訂」「校正」の必要によるもの、すなわち詩的自由形にとどまると考えられる（笠松 2022d 「梵文『法華経』に見られる動詞 *bhū* の中動態語形」）。

4.3. 禁止法の語法について

śoc/śuc 「悲しむ」ないし *bhay/bhī* 「恐れる」の禁止法の語法を各写本に徴した。結論的には、原『法華経』段階では現在語幹の禁止法（ヴェーダ文献であれば、この語法は本来「停止」命令を意味する）が「禁止」命令の意味で用いられていたと判断せざるを得ない。他方、戸田が言う「R 系」写本群ないしこれに近い写本では、サンスクリット文法的に正統なアオリスト語幹による禁止法が用いられている。これら新層ネパール写本群は、より「正しい」サンスクリット文法の知識を持った人物によって「校正」された後の姿を示すものであろう（笠松 2021a 「KN 322,4 *mā ... śociṣṭa*」, Kasamatsu 2023a “*mā bhaiṣṭa / bhāyatha*”）。

4.4. thematic と athematic の推移について

ヴェーダ語ないし古典サンスクリットであれば現在語幹を第 II 類で作る動詞（報告者が今回扱ったのは *ās* 「座る」、笠松 2022c 「梵文『法華経』における動詞 *ās* の活用について」）や第 IX 類で作る動詞（同様に *jñā* 「認識する」、笠松 2022b 「梵文『法華経』諸伝本における動詞 *jñā* の現在語幹活用形の変遷素描」）も、中期インド語では母音幹 (thematic) に移行するのが通例である。

thematic 語形は、多くカシュガル写本に残る。カシュガル写本が古形を残すと想定したいが、書写年代のより古いギルギット写本は多くサンスクリット語形を示すように見える。ギルギット写本は、2 人称単数・3 人称単数では綺麗なサンスクリット語形を示すが、しかし 1 人称複数

や現在分詞形で thematic による語形を残す。恐らくこれはギルギット写本伝承者のサンスクリット文法の知識の限界点を示すもので、今後は彼らのサンスクリット観それ自体を解明する必要がある。

4.5. テキスト内部の層序を検出する指標の例

動詞 *bhāṣ* は本来、中動相で活用する動詞である。しかし *Saddhp* においては、韻文部分では多く能動相で、散文部分ではおおむね一貫して中動相で活用するよう見える。この対立は韻文・散文間の言語層の差異を示唆するかのようだが、第 V 章前半部分 *Kashg V: 125a7^p bhāṣati* (~ *KN V: 124,2 bhāṣate*) の対応はこの仮定に反する。ところが後半部分で、カシュガル写本は一貫して中動態で読む。これは前半・後半部分の層序の存在を、漢訳の有無ではなくサンスクリット原典から看取することを可能とする (*Kasamatsu 2023a The present forms of the root bhāṣ in the Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*)。

従ってほかの章でもこうした事情が観察されるなら、そこには漢訳の対応の有無にかかわらず言語層・文献層の差異を想定することが可能である。それは恐らく、*man* 「考える；思う」の異読に見ることができる。この動詞は通例中動態 (*manyate*) で活用するが、中央アジア・ファルハードベーク写本が *manyati ... manyate* と読む箇所を並行を、カシュガル写本は *manyate ... manyate* と読む。これは後者の書写年代が遅れ、その間に「正しい」文法知識によって「校訂」されてしまった後の姿を示すものであろう (*笠松 2023c 「梵文『法華経』諸伝本における動詞 man の現在活用の推移について」*)。

4.6. 思想的観点からする検討

鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』「安樂行品」には「大臣官長」の例が 2 度存する。しかしサンスクリット原典にはこの大臣 (*rājamahāmātra*)・官長 (*rāja-puruṣa*) の列挙は 1 度のみで、一方では単に官長 (*rāja-puruṣa*) のみを挙げる。古来この「官長」は高位高官に属するとみなされてきたが、実は用例を精査すればこれはもっぱら社会的には劣位の刑吏・警吏を意味する。羅什の、いわば誤訳によって「官長」の語義の正確な理解はなされぬままに置かれ、同時に *rājapuruṣa* (語義的には「王の下僕」を意味する) の救済への顧慮もまたなされぬままに置かれはしなかったか。現実社会に隠微に残る刑吏をめぐる差別を思うに、この「誤訳」は心残りに思われる (*笠松 2023b 「rājapuruṣa と rājapurisa—羅什訳「官長」をめぐる—」*)。

このほか過去の習慣的動作を意味する現在直説法 + *sma* の構文が、単なる過去の意味に転用され、写本年代が新しくなるにつれ使用頻度が増大すること、偈文に特色的であるはずの MIA 的な *gerund*, *abhi-vanditvā* が散文中に現れるがこれは写本伝承上の誤解に基づくことなど、本研究期間に作成したメモ類は纏めてモノグラフとして印刷した (*笠松 「梵文『法華経』試論集」(科研費報告 monograph, vi+95 頁) 2023 年 3 月*)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 笠松 直	4. 巻 16
2. 論文標題 KN 322,4 ma ... socista	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 南アジア古典学	6. 最初と最後の頁 139-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Sunao, KASAMATSU	4. 巻 70-3
2. 論文標題 ma bhaista / bhayatha	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 印度学佛教学研究	6. 最初と最後の頁 1095-1101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 笠松 直	4. 巻 48
2. 論文標題 梵文『法華経』諸伝本における動詞jnaの現在語幹活用形の変遷素描	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 論集	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 笠松 直	4. 巻 51
2. 論文標題 paridevate, paridevadhvam, paridevatha	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 仙台高等専門学校広瀬キャンパス 教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 笠松直	4. 巻 47
2. 論文標題 梵文『法華經』諸伝本における動詞ramの現在語幹活用形の変遷	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 論集	6. 最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笠松直	4. 巻 18
2. 論文標題 梵文『法華經』諸伝本における動詞manの現在活用の推移について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 南アジア古典学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笠松直	4. 巻 49
2. 論文標題 rajapurusaとrajapurisa 羅什訳「官長」をめぐる	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 論集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笠松直	4. 巻 17
2. 論文標題 梵文『法華經』における動詞asの活用について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 南アジア古典学	6. 最初と最後の頁 125-136
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笠松直	4. 巻 11
2. 論文標題 梵文『法華經』に見られる動詞bhuの中動態語形	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 歴史言語学	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.57565/hlj.11.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kasamatsu, Sunao	4. 巻 71巻3号
2. 論文標題 The present forms of the root bhas in the Saddharmapundarika-sutra	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『印度学佛教学研究』	6. 最初と最後の頁 998-1003
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 笠松 直
2. 発表標題 梵文『法華經』諸伝本における動詞jnaの現在組織の推移について
3. 学会等名 第62回 インド学宗教学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 笠松 直
2. 発表標題 ma ... bhaista / bhayatha
3. 学会等名 印度学佛教学会・第72回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 笠松 直
2. 発表標題 梵文『法華經』における動詞bhuの中動相語形の検討
3. 学会等名 日本歴史言語学会2021年大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 笠松直
2. 発表標題 梵文『法華經』諸伝本における動詞ramの活用形の推移と写本伝承
3. 学会等名 日本歴史言語学会・2020年大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 笠松直
2. 発表標題 梵文『法華經』に見られるhaの活用および派生形について
3. 学会等名 日本歴史言語学会・2022年大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笠松直
2. 発表標題 梵文『法華經』諸伝本に見られる動詞bhasの活用の推移
3. 学会等名 日本印度学仏教学会・第73回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笠松直
2. 発表標題 梵文『法華經』諸伝本における動詞manの活用の推移について
3. 学会等名 第63回・印度学宗教学会・学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 笠松直
2. 発表標題 古代インドの刑吏の歴史とその「解放」 nagaraguttikaを巡る試論
3. 学会等名 第63回・印度学宗教学会・学術大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 笠松直	4. 発行年 2023年
2. 出版社 科研費報告monograph	5. 総ページ数 101
3. 書名 梵文『法華經』試論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------